

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

SER no.020; 内容解説

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横山, 廣子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00002117

内容解説

横山廣子

本書は日本語、中国語のそれぞれ10篇、合計20の論文から構成されている。ここでは所収論文の内容の概要を紹介する。今回の国際的共同研究の成果を日本で刊行するにあたり、特に中国語によって執筆されている論文については少し詳しく解説し、日本語を媒介とする研究成果の周知の便宜をはかりたい。

最初の「中国内蒙古自治区におけるモンゴル族の牧畜経営の多様化―牧地配分後の経営戦略―」（小長谷有紀）は、中国内蒙古自治区での人民公社解体以後の牧畜経営の実態を調査し、中国の定住化政策の下で現地牧民がどのような対応を選択しているかを分析している。領域的にはモンゴル高原全体を視野におき、また時間的には伝統的な遊牧経営の戦略という角度から考察を行なっているのが特徴である。それにより内蒙古における特徴が浮き彫りになると同時に、牧畜システムと移動の問題を環境保全や新たな社会経済状況の中で捉え直そうとしている。脱集団化時代を含めた牧畜パラダイムの提示を目指す意欲的な研究である。

同様に内蒙古での現地調査に基づいて執筆されたのが、次の「農耕蒙古族の家観念与宗教祭祀―以内蒙古土默特左旗把什村的田野調查為中心―」（麻国慶）である。こちらは牧民ではなく、20世紀初めまでに、すでに定着して農耕に従事するようになっていたモンゴル族の「家」の観念と祭祀活動を考察している。

調査地はフフホト市に近い土默特左旗で、同地には清代初期から多数の漢族の流入が始まり、土地が開墾されていった。それにより、従来は遊牧を営んでいた周辺のモンゴル族の農耕民化が徐々に進展した。この漢族と同様の生業形態への転換は、モンゴル族の間に漢族の文化の浸透をもたらした。執筆者はそれら定住化したモンゴル族において、漢族の文化や社会の根幹をなす「家」の観念と祖先崇拜がどのような発達を見せているかに注目している。「家」を中心とする家族・親族関係の発展が系譜や居住形態、祭祀活動の詳細を通して明らかにされる。また、広く信仰活動を観察し、漢族が流入する以前にモンゴル族が信仰していたチベット仏教が衰退し、道教的な民間信仰の普及が報告される。

しかし、これら文化的ないわゆる「漢化」の一方で、それらモンゴル族の間に依然として強烈な民族意識が保たれていることを執筆者は指摘する。彼らは家譜の編纂といった漢

族的な営みを通じて、家族意識と同時にモンゴル族としての民族意識をも強化しているというのである。これらの分析を通して執筆者は、家族としてのアイデンティティは民族的アイデンティティの前提条件ではないか、という問題を提出している。

続く「嫩江流域におけるダウール（達斡爾）族の漁業事情」（珠榮嘎）は、現在、内蒙古自治区の東部から黒龍江省にかけて居住するダウール族が、黒龍江省嫩江流域で伝統的に行なっていた漁業の詳細を明らかにする。ダウール族は新中国成立以前には「ダウール・モンゴル」とも呼ばれて、モンゴルの一部とみなされていた人々である。従来は黒竜江（アムール川）の中、上流域で農耕と牧畜に狩猟や漁労で生活していたが、17世紀中葉頃からロシアの圧迫で南下が始まった。現在は農業や商業で生計を立てる者が多い。

モンゴル族出身の執筆者は日本語に堪能で、漁法の技術や魚類の名称などを日本語で正確に記述することに苦心している。漁法と漁具について詳しい情報を記録するのみならず、漁場の占有や捕獲した魚の分配法といった内容についても解説する。また、ダウール族が捕らえる代表的魚類については、ダウール語、満州語、漢語、日本語の対照表を載せている。歴史的にも貴重な資料を提供するものである。

同じくモンゴル族出身の研究者による「20世紀中国蒙古民俗学探索的歷程回顧与展望」（納古单夫）は、20世紀以来の中国のモンゴルに関する民俗学の歴史を回顧し、その成果を論評した論文である。

モンゴルの民俗学がいつ、誰によって始まったかについては議論があり、それを外国人によるモンゴル研究とする見方もあるという。それに対して執筆者は、その端緒を1918年刊行の『蒙古風俗鑑』とほぼ同年に執筆された『蒙古紀聞』とする。本文ではモンゴル民俗学の先駆者らの種々の業績を整理して概観し、評価を行なう。またその後の成果についても時代を追いながら解説している。その中でたとえば鳥居竜蔵の業績の評価も行なわれる。特に中国社会が改革・開放に転じ、学術研究が発展した80年代から90年代については、その時期を代表する7つの業績について詳しく取り上げている。またこの時代にはその他の研究も含めて民俗史、婚俗、飲食文化、モンゴル族の一大イベントであるナダム、服飾、音楽や舞踏、あるいは神話や民謡など研究対象が大きく広がったことが指摘される。内蒙古地域でのとりわけモンゴル族による研究の状況をモンゴル族の観点から整理した評論として意味を持つ。

続く「新疆喀什地区的民族人口分布」（馬戎）は、新疆ウイグル自治区南部のカシュガル地域において、人口分布分析の観点からウイグル族と漢族との民族間関係を考察する。同

地域はウイグル族人口が特に集中しており、新疆のウイグル族と漢族との関係を研究する上で重要であると執筆者は指摘する。現地調査は地域内の4県の範囲で行なわれた。

当地の民族人口分布は分離を特徴としている。従来、定住する漢族は県庁所在地や国営農場や油田などの国営の経済単位に集中して居住し、近年になってようやくウイグル族が多く居住する農村部で経済活動する漢族が散見されるようになったという。少数の国営園芸場において両者間の交流と融合が進んでいる以外、このように互いが分離した居住生活状況は、両民族間の交流を限定的なものにしているという。これは民族間関係にマイナスの影響を与えようと執筆者は考え、いかに民族間交流の条件を改善するか、経済管理体制、人口流動、教育体制などの面から検討すべきだと述べている。

「中国青海省・土族語における危機の意味」(庄司博史)は、「言語の危機」の問題を青海省の土(トゥー)族の現状に基づいて多面的に論じている。日本においては研究がきわめて少ない青海省の土族に関して貴重な資料を提供するとともに、言語の変化という普遍的な問題に対する洞察を与える。特に注目されるのは、現地の土族が民族的アイデンティティの指標や拠り所と考えている土族語が、それぞれの狭い地域で、自分たちが話す土族語であり、標準化された言語規範がないという状況である。「話者がそれぞれのことばを土族語と認識する限り」、多言語からの影響がさまざまな言語上の変化を生んでも、「土族語自体は存続するという解釈もできる」と執筆者は指摘する。

次の「神話に表れた民族間関係ー中国西南部少数民族を中心としてー」(大林太良)は、中国西南部少数民族に伝わる民族間関係を語る神話を収集して分類し、それに考察を加えたものである。神話の中で民族を分類する場合、身体の部分、皮膚の色、言語、食物、居住地のすみわけ、服飾あるいは死体処理法までさまざまな基準があることが明らかになる。そして、たとえばチベット族の神話に現れる「死体処理法」という基準は世界的に見ても珍しいが、彼らにとっての葬法の重要性を示すと指摘される。しかし、他の基準については世界の他の地域においても見出され、それらの事例およびそれらに関する研究を合わせてみることにより、分析をさらに深化させる可能性が見えてくる。特に「自民族を中心として民族間関係が兄弟関係によって語られているとき、この範疇に入る民族と、その外の民族という、同心円的な構造が考えられる」という指摘が興味深い。

「民族とその文化における国家政策・民族間関係の影響に関する一事例ー広西北部三江侗族自治县斗江郷の場合ー」(塚田誠之)は、多民族共住地域において、政策や民族間関係が民族とその文化の形成に対して及ぼした影響を、現地調査に加えて民国期の地方志など

の資料を用いながら明らかにし、考察するものである。当地に居住する「六甲人」は、「少数民族」かどうかの民族識別の事例として取り上げられることのある人々で、「漢族」であるとされるが、一般の漢族、つまり現地で「普通漢族」と言われる人々とは異なる特徴を有する人々である。本文のように現地調査に基づいた同地区の詳細な資料はこれまでになく、その点でも注目される。執筆者は民族間の接触による文化や民族的アイデンティの多様な変化のあり方を指摘し、さらにそれらの要因について、政策の作用を認めながらもさらに検討する必要のある問題点を指摘し、今後の展開の方向を示している。

続く「壮族“土俗字”的現状和前景」(胡起望)は、同じく広西チワン族自治区において、その主要少数民族である壮族の間で見られる「土俗字」、つまりベトナムにおけるチュノムのように漢字を元にしてそれに若干の追加や加工を施して民族語が表記できるように作成した文字システムについて紹介し、その現代における復興と発展を論じる。この文字が歴史的に地名や人名の表記にかなり広く使われていた事実については従来、あまり知られていなかった。しかし本文は、その使用を多数の歴史文献に基づいて具体的に例証している。この文字は民間ではよく使われていたにもかかわらず、土司などのチワン族上層には正統な文字として承認されず、そのことが広範な普及を妨げ、またその存在に関する情報を限られたものにしてきた。

執筆者は歴史文献のみならず、現地調査によって「土俗字」で記されたチワン族の民族劇(壮劇)の台本を収集し、その中で文字使用に関する分析を行っている。また、この文字を解することのできる現地の人々との懇談によって、現在、新中国の成立後に作られたラテン文字によるチワン文字の正書法では現地のことばを十分には記述できない不満を持っていることを確認している。本文中には、現在もこの文字が当地の地方新聞誌上で使用されていることを示す資料が掲載されている。さらに近年では「土俗字」を印刷する煩雑さを避け、漢語の表記に一般に今日広く使用される漢字や漢語のラテン文字表記であるピンインを部分的に使用してチワン語の音声を表記するという新しい用法も出現していると執筆者は指摘し、それらのまだ未成熟な用法の問題点の解決に共に協力していく必要性を唱えている。

次の「広西民族文物苑述評」(呉偉峰)は、広西チワン族自治区博物館の展示場の拡大発展として設置された広西民族文物苑について、当該施設の主要スタッフである執筆者が、政府主導によるその建設に始まり、展示内容、さらには社会的効果や経済的利潤、今後のさらなる発展計画までを紹介するとともに、自身の評価や見解を述べたものである。民族

文物苑の最大の特色は、それが観客に何かを見せる場であると同時に、諸民族がそこをかれらの大きな「家」として、各民族の祭日に集い、楽しむ場であるという点である。そしてその楽しむ様はまた、他の人々にとっての「見もの」にもなる。執筆者はそれを「芸術の境界と現実の生活とを融合して一体化している」と表現している。

執筆者も述べるように、民族文物苑は自治区における民族政策が具現化した象徴でもある。事情を知る内部の人間として、建設構想段階からの事業の進展の軌跡をかなり詳細に記している部分は、完成した施設の問題とは別の意味で、また貴重な記録である。1980年当時から構想があり、88年の自治区成立30周年の記念日から開園したという事実は、この地域が中国の少数民族中、最多の人口を擁するチワン族を中心とする自治区であることと無関係ではないであろう。早くから北京に建設する構想がありながら、まだ完成を見ない「民族博物館」の場合とは異なる進展のプロセスがうかがえる。

今日、民族村や民族博物館が各地に建設されつつある。広西は先行例であり、同自治区の博物館と比較すれば利潤を上げてはいるものの、後続の深圳や桂林の施設と比較すると、経済効果は低い。今後の発展を目指し、執筆者は、1) 娯楽中心の観光施設である民族村とは異なり、少数民族の真の姿を再現する場であるために、歴史や文化を研究するスタッフを増やすこと、2) しかしながら、他方で観光業との結びつきを強めること、3) 博物館附属という形態ではなく、経営の自主権を獲得して企業形式の経営管理を行うことを提案している。

近年、中国の少数民族地域では観光による経済発展を目指すケースが多いが、次の「旅游産業与少数民族的文化展示」(周星)は、貴州省東南部における民族的情緒や文化を吸引力とする観光開発の状況を現地調査に基づいて考察している。この地域での観光は3類型に分けられる。

類型化の第一は、民族の文化や歴史性あるいは生態学的環境の条件の整った典型的村落を選び、事前に必要な投資を行って観光客受け入れの食堂や宿泊などの設備やその他の準備を施し、「民族文物村」として開発するタイプである。選ばれた村落は、1986年に整備された「貴州省文物保護管理法」によって「民族保護村落」に指定され、「村落博物館」などと称されることもある。第二は、伝統工芸技術や建築あるいは民族舞踊など、何か独特のものを持つ村落が、観光や調査研究の対象となる、いわば「專業村」タイプである。この場合、訪問者歓迎のために村民が動員されることはない。観光化の促進が「專業化」の度合いを誇張する結果をもたらすことがある。第三は、少数民族がその生活の中で行う

祝祭や集い、あるいは市などの活動の時期と場所に合せて、観光が組織されるタイプである。これは時間的制約のある観光だが、現地の時間的空間的配置を十分に把握することにより、観光時間は延長される。このタイプの観光はまだ比較的少なく、観光客の中にはそれを特に好む者もいる。執筆者はこの第三のタイプに今後の発展の可能性を見ている。

特に雷山県のミャオ（苗）族地区の2事例、第一のタイプの上郎徳寨、第三のタイプの西江鎮の「鼓蔵節」の祭り観光については、詳しく紹介されている。

執筆者はこれら貴州省東南部での調査を踏まえた上で、さらに観光の発展と文化との間で生じる相互作用にかかわる諸問題について議論を発展させる。見る側と見られる側との間のズレ、「見せる」ことが動機となって生じる新しい文化的営為、文化の商品化、博物館建設の問題など、観光に関わる重要な諸問題が具体的状況の考察を通じて指摘されている。

同様に貴州を考察対象とする「和合発展的貴州制度文化」（黄才貴）は、多民族が居住する同地域の社会の統合システム、社会構造に関する論述である。執筆者は、これを物質文化、精神文化とともに文化の三つの層をなす「制度文化」と呼ぶ。

執筆者によれば、貴州の大きな特徴の一つは社会の発展状況の不均衡で、発展段階の異なる制度文化が併存していることだという。経済が農業に立脚する時代に限ると、それは3類型に分類される。第一は、南部のヤオ族の「油鍋」制や「石牌」制、あるいは東南部のミャオ族の「鼓社」制で、血縁を中心とする自発的社会組織形態である。第二は、東南部のトン族の「峒款」制で、地縁を中心として、政権組織成立へ向かう過渡的な組織形態である。第三は、西北部のイ族の「則溪」制や西南部プイ族の「亭目」制で、血縁と地縁に基づき、強化された封建領主制の社会形態が見られるという。これらの3類型は、中国の中央集権制度が浸透し、変化する歴史の過程に応じて、それぞれ変化を重ねてきた。執筆者は歴史的資料を用いながら、その軌跡を追いかけている。

貴州の制度文化の特徴は、発展段階の異なる制度が隣接して、あるいは入れ子細工のように層を異にしながらも併存して和合している奇形であると執筆者は述べ、その構造を、費孝通によって唱えられた中国全体の「多元一体」構造に通ずるものと提示する。

「文化再興エスニシティシップソンパンナー、タイ・ルーの事例からー」（長谷川清）は、雲南省西南部のタイ・ルー社会において、文化大革命以降に国家政策の転換に対応しながら進展してきた民族文化の伝統の復活や活性化の過程を考察する。特に仏舎利などのブツダの遺物や仏像、経典などが納められる「タート」と呼ばれる建造物に焦点が当てられる。それが上座仏教の受容にかかわって、「土地の霊」の力に対抗する意味で建立されたという

起源伝承が紹介され、その再建の事例が報告されている。タートの再建は、その地点の村落だけの事業に留まらず、周辺村落との関係の活性化をももたらす。国家による伝統文化の選別とは別の次元で、市場経済と観光開発の進展で変容している社会に生きる少数民族の人々にとって、伝統文化に対する意識や意味づけがどのように変動していくかを注目しなければならないと指摘している。

「民間表演与影視伝媒的互動—以関索戲為例—」（郭浄）は、雲南省澂江県の漢族の村落でテレビ局が行った地方劇の取材において、撮影隊と村民との間で展開した相互作用に着目し、その撮影取材の過程を記録した論文である。執筆者は取材チームの顧問として同行した。影取材自体もビデオカメラで記録され、分析の資料となり、また編集されて、本論文と対を為す研究の表現手段ともなった。

省都昆明から車で4、5時間のその農村には、『三国志』の関羽の息子とされる関索が重要人物として登場する芝居が伝承されていた。近年、それが追儼の演劇の珍しい種類であると研究者が指摘したことで、「関索戲」は地方の文化人、省都や北京、台湾から訪れる研究者やメディアの注目をにわかに浴びるようになった。各地の撮影隊の訪問は、地方芝居の伝統的な上演法を変化させた。元来、村落生活の特定の時間にはめ込まれていた芝居は、来訪者の求めに応じて演じられるようになり、それに伴って他の細部の改変も行われる。それを受け入れるのかどうかをめぐって、さまざまな人間同士の間で、そして一人の人間が抱く種々の観念や感情の間でも葛藤と駆け引きが起こった。

最近の中国のメディアは、より「自然」で「真実」の姿を記録し、報道すると主張するが、現地の撮られる側の人々に、その視点を表現させることはなく、往々にして「神のまなざし」と揶揄されるような状況が見られるという。執筆者は、自身も参与した本事例を通し、現地の歴史的背景など取材対象周辺に対する十分な理解が必要だと指摘し、最終的に表現された「真実」は、決して客観的に存在していたものではなく、撮影する側とされる側との衝突やさまざまな人々の意見の表明を経てたどりついた複雑な意味での「真実」であると述べている。

「白族婦女生育和教育観念的変遷」（楊国才）は、ペー（白）族の女性の出産や養育、あるいは教育に関する観念を対象とする論考である。まず伝統的な状況を記述し、それが社会の変化に伴い、どのように変化し、その要因は何であるかを大理市内の農村での現地調査に基づいて分析する。執筆者の目指すところは、女性をめぐる状況のさらなる発展への課題を、その議論から明らかにすることにある。

地理的環境、父系宗族を中心とする親族組織、宗教信仰、恋愛結婚を主とする結婚の慣習、核家族を主とする家族をめぐる慣習、葬礼の習俗といった多面的な要素との関連から論じられ、明らかにされるペー族の伝統的な観念は、一口で言えば、女性は多く産んで育てるものとされ、その教育を軽んじるものであった。それが社会主義体制への変化、70年代からの計画出産政策の実施、そしてとりわけ80年代以降の改革開放政策下の経済発展の中で、変容してきた。

出産と養育にかかわる変化をもたらした種々の要因の中で、執筆者は、保健衛生や計画出産など、政策的として進められる活動に積極的に参与する農村女性が存在すること、さらにその結果が、村内の女性間に見られる相互作用や影響関係によって拡大と促進を遂げることに注目している。また、近年の経済発展や産業構造の変化は、農村の人々に女性の教育の重要性を認識させ、高等教育機関への進学率で女子が男子を上回る地区もあると指摘される。

続く「国家政策の変遷とペー族農村社会」（横山廣子）も、雲南省大理市内のペー族の農村での調査に基づく考察である。執筆者が15年以上にわたって調査を続けてきた村落の変化を長期的に整理して概観し、国家の政策や行政の推移を合わせながら、農村社会の変化を論じている。それによれば、新中国以降、さまざまな変化が起こってきたが、90年代に入って、従来とは異なる、「伝統的」とされてきた文化や社会の枠組みを揺るがすような大きな変化が観察されるという。農民の考え方や意識、価値観の変化にかかわる変化であると言える。それらについて、さらに踏み込んだ研究と分析が待たれる。また、このような長期にわたるデータは、他の村落や地域との比較をする上でも重要な資料となりうるであろう。

「雲南怒族の弩弓：製作と射技に関する調査報告」（野林厚志）は、省西北部のビルマ国境に近い怒江リス族自治州福貢県のヌー（怒）族の村落でのフィールドワークに基づき、弩弓の製作過程、形態、射技に関して論述する。民族考古学的手法による研究を行ってきた執筆者が、ヌー族とその周辺で現在も日常的に製作され、使用されている特徴的な物質文化の一つである弩弓を取り上げ、詳細な観察と計測した数値を記録している。それにより、ヌー族の弩弓は狩猟活動に適した道具として発展し、漢族が武器として用いた弩弓とは機能の異なるものであることが明らかになる。

「中国福建省における宗族の再興—閩南地域の老人会を中心にして—」（潘宏立）は、近年の経済発展が目覚ましい福建省南部の沿海部、石獅市の一村落を中心とする宗族の再興

をめぐる研究の中で、特に老人会を取り上げた論考である。老人会の正式名称は「老年協会」であり、国家政策によって1980年代に全国各地で組織されていったものだが、調査地域では、祠堂の再建や族譜再編の活動を通して宗族組織が再興されていく際、老人会が決定的な役割を果たした。本調査研究は、老人会がそのみならず、国家と地方社会との間に介在して状況に応じて柔軟に立場を移動させる「群衆組織」として、農村社会の諸問題に対処し、村落社会の安定に寄与していることを指摘している。

「試論南中国漢族及漢語的来源」(鄧曉華)は、中国南部の漢族や漢語方言の起源と形成の問題に対して、従来の北方からの移動や伝播を軸とする説明ではなく、北方由来の要素と南方の土着の要素との相互作用を重視する議論を展開する。このような視点は、費孝通の中華民族は「多元一体」構造をなすという議論をはじめとして、中国全体の規模で文化や民族の成り立ちを論ずる場合においても、近年、主流になってきている。

本論文の構成は3部分からなり、最初に南中国の漢人の起源に関して、古人類学、考古学、歴史学、文化人類学と言語学の各領域において、これまでの研究成果が検討される。そのいずれの領域からも、異なる系統の人間や言語の間の相互作用や融合によって、現在の南中国の状況が生まれたことが示唆される。

執筆者は従来、言語人類学的研究を主として行なってきた研究者であり、漢語の南方方言の形成に対する自説を展開させる第二、第三の部分で、その真骨頂が発揮される。

第二節では、まず、漢語の南方方言の起源に関する従来の研究の検討が行なわれる。基本的に、北方にあった漢語が南下によって変化を遂げ南方方言が生じたとするそれらの説は、ある祖語文化が直線的に発展していく考えている点で、「直線的理論」だと執筆者はみなし、それに対して、古くから多文化の相互作用から生まれた「古南方漢語」が存在したと主張する。それを考古学の成果を用いながら実証しようとするのが、第三節である。

その議論から一例を挙げよう。「齒」を意味する語は、甲骨文では「齒」であったが、上古漢語の「牙」は、オーストロ・タイ系言語の影響で、南方の象牙が献上されるのに伴い、それを意味する語も借用されたためだとする。古代の越人が好んで使用した「弩」も、戦国時代に漢人に伝わり、物質文化の伝播とともに語の借用が起こったとする。これらの仮説の言語学的な検討は私にはできないが、近年、さまざまな地域文化間の相互作用を解明している考古学研究の成果に触発された、文化と言語との動態を描く議論となっていて、最も執筆者の独創性を感じる部分である。

「中国・経済発展と少数民族」(佐々木信彰)は、マクロな視点から改革・開放政策の下

での20年余りを振り返り、少数民族の社会と経済の状況を総括する論考である。近年の中国経済の成長をもたらした外資系企業、私有制企業と郷鎮企業、あるいは産業構造、さらにハードとソフト両面のインフラといった要因に関して、主として内陸の西部にある少数民族の地域は、東部などから遅れをとっていることが諸統計から示される。また、貧困地域も少数民族地域に多い。中央ではその対策として、先進地域に特定の後進地域を割り当てて援助させる政策をとっている。しかし、東部の開発主導で少数民族地域がもっぱら受身の立場に置かれる状況では、貧困の再生産が続き、経済的自立にはいたらず、また、環境破壊の深刻な問題を引き起こすと指摘されている。